開成学園排球部OB会

会　　報　No.5

開成学園排球部創部30周年記念号
（昭和51，52年度合併号）

昭和53年初夏

はじめに

今年もまた、あらたにＯＢになられた五十三年度卒業の諸君を迎え、益々ＯＢ会も充実したものになっていくことを心から確信しております。昨年は、我が排球部三十周年という記念すべき年で、その記念総会も諸先生、諸先輩の御協力により大成功を収めました。ちょうどこの三十周年の年に幹事長を仰せつかりましたが、その一年を通して会の全体的運営はあまり芳しいものとは申せませんでした。任期を終えて正直なところほっといたしましたが、同時にその責任をいまだに痛感する次第です。このたび、あらためて三十周年記念会報を発行いたします。これにあたり、多くの先輩方から御多忙のなか原稿やおはがきをいただき心から感謝申し上げると同時に、当初の予定より会報の発行が大変遅れましたことを深くお詫び申し上げます。私が任期を終えて島川君が幹事長になり、昨年は荒川区民大会では優勝するという成果を収め、当ＯＢ会もいよいよ軌道に乗ってきた感じです。この、ようやく吹いた芽を枯らすことなく育てていけたらと希望して止みません。今後も会員全員がいっそう親睦を深め、開成学園排球部ＯＢ会が益々発展しますよう、先輩並びに後輩の皆様の御指導、御協力を心からお願い申し上げます。

前幹事長　市村　幹司郎　（五十年卒）

目　次

開成学園排球部ＯＢ会会則及び役員　……1
寄稿――創部三十周年に寄せて　……3
吉村功氏、鈴木祥治氏、大滝利尚氏、小林正明氏、
宗近伸匡氏、鈴木康治氏、富部直希氏、西村隆氏、
清水淳一氏、島川誠一郎氏
Here and There　＜返信の近況報告から＞　……13
現役からの声　……15
開成高校排球部主将　佐藤徹
ＯＢ会からのおしらせ　……16
会費納入、事業報告など
編集後記　……20

開成学園排球部ＯＢ会会則

第一条　本会は開成学園排球部ＯＢ会と称する。

第二条　本会は開成学園内に本部を置く。尚、必要に応じて地方に支部を置くことを得る。

第三条　本会は会員相互の親睦を図ると共に開成学園排球部の発展に協力する事を目的とする。

第四条　本会は第三条の目的達成のため、会報、会員名簿の発行及び、その他必要な事業を行なう。

第五条　本会は開成学園排球部の出身者（会員）を以って組織する。

第六条　本会に会長一名、副会長二名、幹事長一名、各年度別幹事若干名を置く。

第七条　本会に顧問及び相談役を置くことを得る。

第八条　会長、副会長、並に幹事長は幹事会に於て会員中より之を推挙し、会長が之を委嘱する。

第九条　第六条、及び第七条の役員の任期は一ケ年とする。但し再任を妨げない。補充の任期は前任者の残任期間とする。

第十条　会長は会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長を代理する。幹事長は幹事会を主宰し、幹事は会務を執行する。顧問、相談役は本会の重要事項に関する諮問機関とする。

第十一条　本会は毎年二回総会を開催する。尚、必要に応じ臨時総会を開くことができる。

第十二条　本会の経費は会費及び寄付金を以って之にあてる。

第十三条　本会会員は会費を納入するものとする。

第十四条　幹事会は事業計画の立案、並に会計幹事、監査幹事の任命を行ない、総会に於て会計幹事は会計報告をなし監査幹事は監査報告をする。

第十五条　本会の事業年度は七月一日より翌年六月三十日までとする。

第十六条　本会則の変更は総会に於て出席会員の過半数の同意を要するものとする。

第十七条　本会則の定めなき事項に関しては幹事会に於

て誠意をもって之を協議するものとする。

以上

この会則は昭和四十九年四月七日の総会において参加会員の圧倒的多数を以って承認されました。

開成学園排球部OB会役員

会長	吉村　功	幹事長	島川誠一郎
副会長	尾賀健一（三十年卒）	会計幹事	松下和正（五十年卒）
顧問	明渡久和（三十一年卒）	監査幹事	金森一雄（四十三年卒）
相談役	中村博次		
	岩谷昭史		
	伊藤清一		
	上迫忠夫		

寄稿

吉村　功（会長・26卒）

私とバレーボールとの出会は昭和二十一年の戦後間もない時期である。バレーボールとはどんなものであるか、見た事もない連中の集りで勿論コーチもない状態で部はスタートした。

高一に出野寛二さんがいるだけで大半は我々中学二年で占めていた。当時、中学のゲームはなかったので、中三から高校の大会に出場していた。勝つ筈もなく、いつでも一回戦での退敗であった。練習方法も判らず自己流であった。唯一のコーチは大学リーグ戦の観戦であった。今の様にテレビもなく試合らしいものに接する機会はそれしかなかった。あらゆる面で恵まれない環境の中で無我夢中でやった。

それでも我々が高三になった春、突然東京でベスト4に残った。そして関東選手権にはベスト8まで進出出来た。今から考えて見て最初から最後まで主力選手がチームにいた事と、非常に皆が仲良しであったと言う事以外にその理由は見つからない様に思う。只、私は大学に入りバレーボール部に入り、私は驚いた。と言うのは、技術そのものよりも基本になる理論を何も知らなかったと言う事である。

それにひきかえ、今の現役諸君は多くの先輩を持ち、本当に幸せと思う。常にコーチを受ける事も出来るし、自分の疑問もいくらでも解決してもらえる。だからもっともっと先輩に接近して、いくらでも吸収する様に努力する事が進歩につながるのではないだろうか。そして又、先輩も多忙とは思いますが出来るだけ、コートに遊びに行って、知っている知識を現役に与えて欲しいと思う。

鈴木祥治（51麻布卒）

先ずは、創部三十周年、おめでとうございます。麻布学園排球部も今年で三十周年を迎えますが、このように長い間、部として続いてきましたのも、先生、OBの方々の御努力はもちろんのことですが、それを生み出すだけの大きな魅力がバレー部そのものの活動にあるからでしょう。現役の時の君しい練習や合宿、また試合に勝った時の喜び、負けた時の悔しさなど、卒業してみるとみな楽しい思い出として残っています。

特に開成学園と麻布学園とは、学校のスタイルが似ていることもありまして、お互いの文化祭、中学・高校の五校リーグでの試合など、色々と思い出も多く、また来業してからのOB戦など、深いおつきあいをしていただいて居りますので、学校は違っても同じ一つのバレー部という気さえします。

最近は受験戦争などという言葉を耳にしますが、そのためか、クラブなどやらずに六年間を過すという者も増えてきましたが、中学・高校と、スポーツに打ち込むということは精神的にも肉体的にも自分自身の成長にとって大きなプラスとなりますし、さらにクラブでの人間関係というものは、卒業してからも一生続くように思われます。

このような大きな魅力がこの三十年間、部をささえてきたのでしょう。今後、両校の排球部の一層の発展を祈って、ここでペンを置きます。

"ネットは高くなった"

大滝利尚（25卒）

小生、昭和二十五年卒となっておりますが、マルマル六年間の開成生活ではなく、昭和十九年四月憧れのペン剣マークをつけて新一年生として入学、其の年の暮には戦局激化の為、止むなく仙台に疎開して、私立仙台育英学園に転校しました。当時育英学園は、余り学問に興味を持つ生徒は少なく、寧ろスポーツ奨励の校風でした。敗戦后のショックから、一日も早く立直り度いと云う願いが、小生をバレーの生活に飛び込ませたと思います。毎日の練習は、開成のそれよりも厳しかった様に思います。高校二年で、オール宮城県立高校のベスト9（当時は9人制）に選ばれたのは、その練習の賜だったと思います。昭和二十四年四月、編入試験を受けて復学、早速バレー部に入部しました。兄貴からバレーばかりやって勉強は大丈夫かと脅かされたのも懐かしい思い出です。生物の石川光春先生は、試験答案に百点満点をつけた事

がないとの噂に敢然挑戦暫らく、バレーの練習をサボって、目出度く?目標達成した事もあり、余りよい部員ではなかったと思っています。大学に進んでからも、関東大学選手権で、野木君のいる東大と一緒に出場する機会もあり、バレーを通じての友人も増えた事は、学生生活をより充実したものにしてくれました。横国大経済学部では、スポーツをやる学生が少なく、この意味で勉強をやらぬ割には教授や学生仲間にアッピールするところ大でした。卒後シーチキンでおなじみのはごろも缶詰に入社、女子バレー部をつくったり、自分自身も同好会で出場したりしましたが、昨今は流石にジャンプが利かず、往年の二段ジャンプとジャックナイフ（一度、後へそり返り、その反動で前へ、シャープに身体を折る動作）をご披露出来ないのが残念です。ゴルフコンペで、白いボールを打つ時、相手コートへ、強烈なスパイクを打ち込んだ様な錯覚に捉われるのは、若さへの願望でしょうか。もう再び、ネット越しに、コートをみることはないでしょう。

貧乏神

小林正明（29卒）

ヘワセダ出てから十五年……と歌ったものだが、開成出てから二十数年、今じゃ天下の中年サラリーマンとあって〃年中多忙〃、諸先輩や後輩諸君にはトントご無沙汰している。なにしろ同輩が一人もいないのだから、二二十九年卒は出席率ゼロだろう。まことに申しわけないことである。こんなことならクラスメイトの一人や二人、名前だけでも入部させておくのだったが、あとの祭りである。

昭和二十八年春、先輩を送ると、小生はイヤオウなしに主将を仰せつけられた。前申すごとく〃同輩ゼロ〃だから、仰せつけた側の先輩諸氏も万やむを得ざる心境だったろうが、当方も当惑した。一級下の三十年卒の諸君は数も多かったが、技倆も人格識見も数等上の人材が揃っていたものだ。恐る恐る辞退を申出たところ一喝され、それっきり。だが、この〃人事〃の失敗は明らかだった。

早い話がその時から、我が排球部は公式・練習試合を含め、連戦連敗を続けたのである。

親しい友人はサッカー部に多かった。部室は隣合せである。ある時、室内にいたら外で友人の一人が後輩に話しかけているのが聞こえた。イヤな話だが、実話である。

「おい、きのうの試合どうだった？　小林は出たのか」

「ハイ、出ました」「そうか、じゃア、負けたな」「ハイ、負けました」

今の会社に入って、創刊当時の「週刊文春」に配属された小生は、間もなくヘンな仇名をつけられた。いわく「貧乏神」。将棋、花札、トランプ、ダイスといった勝負事が仕事の合間に盛んだったが、それを見物していると、小生がいる側がきっと負ける。いつとはなしに「小林は貧乏神だ」と定評が生まれた（今でも、ビンボーさんと呼ぶヤツがいる）。ハタと思い当ったのである。ハハン、おれは開成時代から貧乏神だったのだな、と。なんとなれば、小生が卒業してから、我が排球部は勝運を取り戻し、〃強くなった〃からだ。

二代目が生まれないことを、祈る！

まだできたバレーボール

宗近伸匡（30卒）

まだ冷い風の吹く三月下旬、都内の体育館で、我社のバレーボール大会が若い人達の要請から、はじめて六人制で行われた。九人制の経験者にはまごつく場面も多々あったが、戦中派も含めかなりの活躍であった。寒い日のことでもあり、若い人々の中には手を紫色に腫れあがらせる者が何人かいたが、九人制派には出現せず面目を施こしたものである。もっとも、翌日の歩く姿は颯爽としたものではなかったが。私自身もこゝ数年というものは、運動といえばゴルフ、テニスを少々する程度であったので、心臓の動悸はかなりのものであった。しかし、若い女子社員に交っての混合六人制は、中々愉快であり社内融和、上役の見直し、再発見に効果もあったようである。二十数年前、排球部に属していたことがとんだところでいかされたものである。

先般、OB会が発足し、昔を懐かしむ機会を与えて下

さったが、比度実際に試合を行い皆から現役時代のことを聞かれると、新たに思い出が鮮明に浮び上ってくる。確か中学二年の時だと思うが、練習中に先輩のサーブを受け損ね、手首を捻挫し築地の接骨院に暫く通ったが、その時の痛みは今でも忘れていない。また、この中学時代はOB会相談役の上迫先生が、ヘルシンキのオリンピックで、銀、銅両メダルの栄誉に輝かれた時でもあり、凱旋帰国の際、先生を本八幡の駅にお出迎えしたこと、練習時の先生の跳躍が抜群であったことなどよく覚えている。高校の青春時代には、三崎での夏の合宿練習場が、女子校校庭だったこともあり、校舎から聞こえるピアノの悩ましい音に、皆でどんな女生徒かと想像したものである。こうしてペンを進めると、名セッター野水、がっちりした尾賀、よく跳ぶ寺島、名クイッカーの永峰、おっとりした小西など、排球部諸君の若き日の姿が本当に懐かしく思い出されるのである。

坂本美一（38卒）

久しぶりでペンをとりました。皆様にはお変わりなく御活躍の事と思います。私が開成の排球部に入部した動機はちょっとしたことでしたが、中学一年の秋、現在体育館がある所にバレーコートとテニスコートが同居しておりまして、そこである日の午后バレーをやっているのを見ました。その練習している人達の中にえらく小さいチョコチョコとよくレシーブする人がおりまして――それが同期の玉田君だったわけですが――私はしばらく見とれていました。まあよく球をおいかける人がいるもんだなあと。私は小学生の頃体が弱く五〇%位は休んでいたようなわけで、なんとか丈夫になりたいと思い、あの小さい人間――失礼――があれだけ出来るのだからちょっとやってみようかなと思い、当時部長でありました上迫先生のすゝめもあり入部したわけです。同期には山本、須田、堤君等かなり力強いメンバーであったと自負しています。（前衛）中衛には安藤、芥川君がおり、安藤君のレシーブは後衛の玉田君のレシーブ、サーブとならんで我々のチームの中では最高のものでした。彼等にサーブがまわってくると、我々前衛はなんとなく強気になったようでした。ただ我々のチームも女性には弱く、妙な

所で女子チームに完敗してあげたり（?）、強いチームにはなんとなく勝ったり、つまりチームの特徴は〝なんとなく強い〟というチームで大変妙なチームでした。その中で一人ガッツのある男が〝ハチ〟山本君でしたが、彼のアタックへのトスは大変むずかしく一cm位左右高低でちがうとダメで、又そのかわり当るとカミソリパンチであり、大変楽しい（?）トスあげをさせて戴きました。私も自治医大の方で内科を教えていますが、体をスポーツでほぐした人は学生の中でもなんとなく違う印象がします。現役諸君がんばって下さい。

私学祭の思い出

鈴木泰之（39卒）

私が中学三年の時、当時高二の飯塚さんが中学の我々のチームの面倒を見てくれており、その当時は勿論現在のような体育館もなく練習ももっぱらコンクリートコートか、部室の前のテニスコートを借りてやっていました。飯塚さんはもっぱら中学の練習にでてきて雨が降っても練習を休まない非常にきびしい先輩でした。結成当時は弱かったチームがだんだん強くなり他流試合によく出かけ色々な学校と試合をし、ついには十四か十五連勝もしました。そして初めに負けた学校にも勝つことができるようになりました。私学祭が開成のコンクリートコートで行なわれ、我が開成中学も参加しました。順調に勝ち進んで準決勝で駒場東邦中学に当りました。駒場東邦という学校は開成と麻布の定期戦に一～二年前から参加してきた学校であり、その年も我がチームは勝っていたので楽に勝てると思っていました。それが思いがけないことに当時九人制のフォワードライトをやっていた私がジャンプしてボールを打った後、トスをあげた小田木君（小田木先輩の弟さん）に足を払われたような形になり、手をついてしまいました。捻挫をしてしまったようなのです。ストップをするたびに手がしびれたようになり、我慢できずそのセットが終わると交代して医者に行く始末でした。医者では捻挫の処置をしてくれました。結局試合は敗れてしまいました。決勝は立教と東邦との争いになり延長戦の大戦の結果2―1で立教が優勝しましたが、

我々のベストメンバーで立教にぶつかったら絶対勝てたと思われました。手首の方はその晩痛くて寝れず、近くの骨つぎに行ったら手首の骨がはずれているとの事でした。入れてもらったら痛みはおさまりましたが、優勝をのがした悔しさと手首の痛さが強烈に印象に残っています。

ある一日

富部直希（43卒）

「ねえ、この娘はどんなタイプに見える？」「うん、太地喜和子に似てるんじゃない。」「そうねえ…どっちかというと好きなタイプ。」「あーらアリガト。握手しましょ。」「でも本当はあんまりスキではないのよ。顔はスキそうな顔してるんだけどね。易者のおじさんに見てもらったら手相がそうなんですって。」

常行はやゝ青白い顔をして黙々とロバートブラウンの水割りを口に運んでいる。淳子が時折横目で常行の顔を見る。「お二人さんはお似合だよ。」と和雄が大部滑らかになった口調で声を掛ける。「そうでしょう。」と淳子が腕を組む真似をする。カウンターの前の角の壁際で、細面の目許のすずしい女性がフォークギターを弾きながら、ナツメロを歌っている。「よお、若大将！」とさっきから淳子と占の話をしていた友生が声を掛けた。その女性はこっちを向いて、微かに笑顔を作った。「ボボブラジルはあれが好き。なんでかわかるか。」「アハハ…当り前だよ。」「ねえねえ、こんな話をこの前さ、朝の電車の中で聞いちゃった。」「高一か高二ぐらいの女の子が二人でさ、『きのう校舎の前の渡り廊下を歩いていたら先生に呼びとめられてさ。それでなんて言われたの？君ここまたげる？　だって。それで何て答えたの。まだまたげないわよ。うそーキャーH。』なんて話してたよ。」「なんだいそりゃ。東武東上線だろ。」男三人と淳子はたわいないおしゃべりを続けながら、歌に合わせて手拍子を打った。常行は何か考えごとをしているかのように静かに飲んでいた。部屋の中はしだいに汗ばむ程になり、淳子がクーラーをかけに席を立った。スポットライトに写し出された煙が揺れ動いた。歌舞伎町の裏の

地下三階のスナックで、僕は体中の疲れがいやされていくのを感じながら、ジンジャエールを口に含んだ。

西村　隆（46卒）

開成を離れてもう六年。汗をかきながらバレーボールにしがみついていった思い出の日々がとても懐しい。

野村証券に入社したばかりの社会人二年生。豊橋支店に勤務。世の中の金の流れをいかに変えさせるかということが大きなテーマである。規則正しい生活を送っているが、毎日過酷なノルマと時間に追われ、健康で文化的な生活とはとても言いきれない。毎朝六時に起床。数種の新聞に目を通す。百本前後の電話をかけ、金持ちの家を訪問し、会社を出るのは連夜九時すぎ。

若い時の苦労は買ってでもせよというが、それにも限界があるのではないかと疑いをかけるくらいヘトヘトになってしまう毎日だ。それに耐えていられるのも中村先生や諸先輩から、雨あられとボールをたたきつけられながらも、何くそと立ち向かっていった意義深い生活のおかげではなかろうか。

金のある人というのは、スキがなく、人生の甘いもしょっぱいも知っている。青二才がその連中と少しでも対等に話ができるように、猛勉強しなければならない。客から教えられることがとても多い。

いいことも時にはある。現先取引で一億円の約定を取ったり、投資信託を一千万円買わせた幸運に恵まれたこともある。

苦渋の毎日だが学生時代の思い出と四季折々の詩情豊かな自然が索漠とした心を慰めてくれる。豊橋は愛知県の東端。美しい海と雄大な連山がそばにある。お隣の浜松には、小生の司会でこの三月に結婚された同期の後藤君がとても可愛いい嫁さんと新婚生活を送っている。

―家――その執拗なるもの

清水淳一（49卒）

母の入院――それは確かに平凡な私達家族に濃密な憂うつ感と屈折したどよめきをもたらした。実際、八十に

近い祖父は病名を結核と聞かされて全く気が動転していたし、三つ年下の妹は成熟した女のもつ重さをますます重いものとして家族の輪の中に沈んでいた。そして、弛緩しきっていた私も粘っこくからみついたこの事態を多少の倦怠感をもって受けとめ、あの母の涙を見た時生じた心の波紋は決して消えることはないだろうという確信にも似た重厚な呟きを感じていた。それが入院以来一ケ月たった現在、母の様態は悪化と小康の無限とも思えるくり返しなのに、我家に満ちたこの和やかさ、まとまりは一体何なのだろう。先日読んだ本に「家族の団楽はますます和やかになった。まるで行方不明の兄を外へ締め出しておいて、心を内へ内へと寄せ合うようだった。」という文を見出して、想像力の奇妙なはじけ方に驚いたものだった。

家族の閉じていく性質——歴史的にはタブーを生み出した土壌とも考えられるこの性質は、家の呪縛を疎み始めて以来、私にとって大きな関心の的だった。と同時に、家族の本質である一組の男女による対幻想によって、自己幻想ひいては対幻想が侵食されることを恐れ始めた。しかし、こうした家族の輪の外へついと出て眺めることのできる私はともかく、家ともっと深い部分で結びつけられている妹の場合は悲惨だ。「女の子はどうしても家の重苦しさと、一心同体のところが、身体でつながってしまっているところがある。」という一女性の言葉を思い出すにつけ、家の中の女の、価値としてではなく、存在としての重さを生々しく感じてしまう。だからと言って、家族内の女のこうした本質を認めた上で、妹のためにこの私が幻想領域の緩衝地帯をつくってやること、それは所詮空しい試みなのだろうか。

——了——

島川誠一郎（51卒）

市村先輩の後をうけ、五十二年度の幹事長の大役を仰せつかりましたから、はや一年がたちました。過日、急拠練習が取り止めになり、そのことを先輩方にお電話をさしあげましたところ、皆様非常になつかしげな声で答えて下さいました。僕はその時、自分が昔を思い起こし

になる一つのきっかけになっていることを覚え、又自分の責任の重さを感じました。僕自身はそれまでフェンシング部、柔道部と練習にも余り出ずに中途半端な態度でやめてしまったので、今度こそはと思って高一の七月に入部して以来、とにかく練習だけはまじめに出ました。体力、技術共になく、最初から下級生に抜かれっぱなしだったけれど、あの時の事を思い返すと、なにもかもが楽しい思い出です。運動後の爽快感、同学年の上野といっしょに飲んだ清涼飲料水の味などは今でも頭の隅に残っているようです。こう考えてみるとバレー部のことが高校生活の大部分であったように思われます。後輩諸君精一杯自分の力を出しきって、よい思い出を残してもらいたいと思います。

Hera and There

〔昨年六月頃の御返事から〕

＊現在、外国部と企画調査室に所属し海外証券投資運用、経済、産業、企業の分析など多面にわたり活躍中。外人の訪問多く、消化に悪い横文字ランチに悩むことあり。運動不足に太り気味。OB会の皆様によろしく。

宗近伸匡（30卒）

＊現在、千葉大医学部小児科の講師です。診療、教育、研究の義務をはたすよう努力しておりますが、不惑の年に達しても一層迷うことの多い日々を送っています。

寺島周（30卒）

＊保安と公害防止に関するお役所の動向に身を置いて毎日忙しいやりがいを感じています。バレーを通じて身に

したチームワークと、山場を乗越えるのに必要な努力を、私の仕事のモットーとしています。たまには暇を作って海外に出かけ、カメラと録音機をいじっています。自分が暇となるかどうかの判断が人生にとって最大の難事だと思っています。身体（Physical & Massive Condition）に自信がないのでプレーはできないが見るだけなら、と思っています。皆様の御活躍をお祈りしています。

永峰光雄（30卒）

＊あいかわらず多忙多忙で明日を迎えています。昨年から、ふとしたことでは幼稚園のなかば、専任者として幼児とつきあっています。付属の図書館もとにかく形をなすに至りました。家族も皆元気ですごしています。

管原理之（31卒）

＊当地（志木市）に開業して三年目になり、診療や医師会活動などに追われている毎日ですが、どうしても運動不足になりがちで、何とかしなければと、いろいろな対策を思いめぐらしている昨今です。

大木豊（36卒）

＊あいかわらず独身です。開成の名がマスコミによく出ますが、かつてのバレー部の仲間が「俺は開成卒だなど」と他人に言ったことはない。でも開成は日本一好きだ。」と言った言葉を思い出し、立派だと思い見習いたいと思います。

宮崎直樹（39卒）

＊現在、一男一女の父。横浜に来て三年半になります。あいかわらずドライミルクを販売しています。産婦人科は得意な分野ですので、何かありましたらご紹介致します。ミルクで入用の時は格安でおわけ致します。

鈴木康之（39卒）

＊銀行員になってから足かけ五年、キマジメなコチコチ人間――こんな銀行員的イメージを打破して頑張っています。明日の世代を担う若きホープ……ボーナスは富士銀行へ。提供は皆さまの銀行協会でした。

金森一雄（43卒）

＊結婚して一年と二ケ月経ち、毎日忙しくてしかたありません。これで子供ができたらいったいどうなるのでしょう。助けて下さい。

片野昭秀（44卒）

＊昨秋結婚し、今秋一年目にして一児の父親になる予定です。しっかりせねばと益々仕事に精を出し頑張っている毎日をすごしております。でも現実はゴルフにあけくれている日々なのですが……。

小川宗男（45卒）

＊勤め始めてから二ケ月、現在、住友生命の八重州支社で毎日忙しく働いています。学生時代のような自由な時間というものがないので、常に自分を見失わないようにと思っています。近くに来たら声をかけて下さい。

関口昌彦（47卒）

＊この四月、興銀に入り福島にいます。四十四年来柔道部OBの鈴木氏と一緒です。長かった学生生活の思い出に浸る間もなく、現実の社会はやってきました。「住めば都」の言葉通り大自然の中で暴れまわっています。

小泉哲郎（48卒）

＊大学の運動部（少林寺拳法部）で夏には幹部の一員となるので、これからいよいよ忙しくなりそうです。先日、又新たな気持ちでがんばるつもりです。

竹内央尚（50卒）

現役からの声

現役主将　佐藤　徹（高2）

春期大会予戦はコート決勝まで進んだが、関東大会予戦は運動会のすぐあとであったため故障者が続出し、くやしくも一回戦負けを喫した。最初のぼくたちもやれるぞという自信が崩れたような気もした。しかし、その後のミーティングで敗因、すなわち練習態度について激しく意見交換され、インターハイこそ本大会へ勝ち進もう

と決意を新たにした。

確かに、開成は他校に対し以前よりは弱いという印象を与えてしまっていると思う。ぼくがこんな事をいうのも何だが、事実である。昨年上の学年と試合に同行し、負けて帰る際痛烈な皮肉を他校生から言われたのも記憶に新しいし、この前も池商OBに「昔の開成は……」といわれて腹を立てたばかりである。

先日、練習を見に来て下さった佐藤先輩もおっしゃられたとおり、ぼくたちは十年前のバレーの練習をしていた。雑誌やら本やら、いろいろ調べたり、考えたりはするが、なかなか実行できなかったようだ。ぼく個人としてはキャプテンとしての力の弱さを痛感してしまう。ただ新しい練習もいいが、まだまだレシーブフォームなどの基本からできてない者が多いので、夏の合宿までは〝基本に忠実〟をモットーに練習していきたいと思っている。

先にも述べたとおり、練習態度の怠慢さが自分たちでやっていてわかってしまう。パス一つにしても惰性でダラダラと終えてしまうことが目立つ。こういうことがすべて敗因であるという声が、今さかんにおこっている。高二にもなって遅すぎると思われるかも知れないが、内部から是正していくことが意義を大いに持つと思う。そしてミーティングにおいて、「とにかく体育館に入ったら気をいれていこう」と決断した次第である。

なんとしても、弱い開成の汚名を挽回し、先輩の方々に恥ずかしくないチームを作ることが、別に先輩方のためにやっているという意味ではなく、大きな目標であるし励みでもある。具体的には秋の新人戦でベスト16、いや8が目標である。

へたな文章でしたが、これを読んで何かを感じるようでしたら、是非現役の練習を見に来て下さい。ぼくらは今バレーをやっていて、やっているからには是非とも勝ちたいという気でいっぱいです。

おしらせ

六月十八日の総会をもちまして、五十二年度の事業を全て終了し、五十三年度に入ります。幹事長は、島川誠一郎（五十一年卒）任期満了により、五十三年度幹事長は六月十八日総会で選出されます。島川君、一年間本当に御苦労さまでした。新幹事長は選出され次第御報告申し上げます。昨年度に引続き今年度も又会員の皆様の御指導、御協力をお願い致します。

◎五十三年度会費について

会費の金額は以下のとおりです。

社会人　三千円

学　生　二千円

直接納入できない方は以下へ納入して下さい。

1. 銀行振込

(イ) 富士銀行……普通預金口座　動坂支店（店番号）236～

（口座番号）608274　開成学園排球部OB会　代表者　中村博次

(ロ) 第一勧業銀行　普通預金口座　飯田橋支店（店番号）061～

（口座番号）1317220　開成学園排球部OB会　代表者　中村博次

2. 郵便振替口座または現金書留、為替

開成学園排球部OB会

松下和正

◎五十二年度事業報告

五十二年度幹事長　島川誠一郎（51卒）

○七月三日(日)　麻布とのOB戦（六人制）

場所：麻布体育館

定例となっている対抗戦なのに、人の集まりが悪く、麻布の人に迷惑をかけました。なお、戦績は五分五

分でした。皆さん、この試合には必ず出ましょう!!

○八月七日(日)　第三十二回国体東京都予選会（成年男子九人制）

場所：岩崎通信機体育館

開成は第三試合なるも、第一試合の審判校。誰かが持ち去って背番号は不ぞろいとなったユニホームを着て、石川島東二と対戦。

（21－7　21－5）　の完敗。試合後、皆でなごやかに渋谷で昼飯をとる。

参加者：明渡（31）、宮崎（39）、佐藤（40）、片野（44）、保条、山崎、老川、高塚、丹治、柏女（49）、市村（50）、島川（51）

cf、保条さんがフィアンセと称する女の人を連れていた。

○十月十日(日)　都クラブカップ（六人制）

自分が出席できず、柏女さんによろしくお願いしますと頼む。確か二回戦まで進んだように聞きました。

○十月三十日(日)　荒川区民大会（九人制）

場所：荒川区竹台高体育館

第三試合だったが、二チームが棄権して急拠第一試合に。ところが人が集らず、役員の人のきつい叱責にかしこまりながらも、なんとか第二試合にしてもらう。戦績は、

対太陽信用金庫（21－11　26－24）、　対広場（21－19　21－14）

で連勝し優勝！　さっき怒っていた役員の人がニコニコ顔で優勝旗、杯、メダル、賞状と渡してくれる。なお、聞く所によると、こうした荒川区での優勝は昔は当り前だったそうな。

参加者：吉村（26）、明渡（31）、玉田（38）、鈴木、宮崎（39）、佐藤（40）、富部（43）、小山、佐藤（45）、柏女、老川、山崎、村山（49）市村（50）、島川（51）

cf、この日、沼津からかけつけられたという佐藤さんのスパイクは往年のものと変わらず、これが優勝の大きな原動力となった。

○十二月四日(日)　荒川区民大会（六人制）

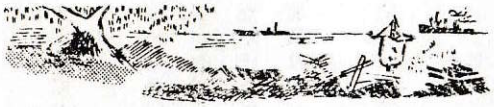
この日はOB総会でもある。総会に出ていると、六人制で勝ったと勝利者達がおみやげをもって騒々しく入ってきた。

総会出席者：吉村（26）、玉田（38）、宮崎（39）、佐藤夫妻（40）、関野、富部（43）、桑田、山本（45）、稲垣、山崎、高塚、中山、保条、柏女、青木（49）、海老沢、松下、市村（50）、島川（51）

以上、全て敬称は略させていただきました。

◎今後の主な予定

五十三年度も本OB会は、総会、試合など会員相互の親睦を深めるための催しを予定しております。皆様、どうかふるって御参加下さい。詳細は、その都度はがきにて御連絡致します。又、今年の秋頃には新しい名簿の作成を予定しております。住所変更の方が数多くいらして、新しい名簿ができるまで御迷惑をおかけ致しますが、どうかお許し下さい。



編集後記

＊A・B・Cの会話

A：「やっと出来たね。」

B：「予定したよりずっと遅れちゃったなあ。」

A：「いや、それは僕が悪いんだ。」

C：「とにかく出来あがって、やっと責任が果たせます。」

A：「ところで会報は今度で五巻めだったね。」

B：「現役のころ、先輩が四苦八苦で作ってたのを覚えてますよ。」

A：「いままでのを全部もっている人はいるかなあ。」

C：「もってます。」

B：「さすがだなあ、C君は。」

A：「そういう人もいるだろう。ところで今度の会報だけれど、みんなに喜んでもらえるといいんだけれど。」

B：「さあ、自分が書いた人ぐらいじゃない。」

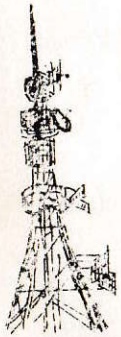
C：「いや、そんなことはありません。みなさん昔を思い出して、きっと喜んで下さると思います。」

A：「ほんとに現役の頃がなつかしいね。D先輩やE君はいまごろどうしているんだろう。」

＊編集後記

上野のパンダ、今年はどうでしょう。騒ぐ方は気楽だけど、動物園の係の人は大変でしょうね。ところで市村君も書いていたように、当初予定していた発行の時期を大幅に延ばしてしまいました。忙がしい中、こちらで指定した期限を守って原稿を送っていただけた先輩方には心からお詫び致します。いただいた原稿はどれも、つわものぞろいです。ほんとうに……。みなさん、ゾクゾクするんじゃないかなあ。是非、読まれた感想などおたより下さい。

（M）



編集　市川幹司郎（50卒）
　　島川誠一郎（51卒）
　　松原秀彰（49卒）